

# 劇あそびを中心として

——保育効果の研究（下）——



村山貞雄 多田淑子  
高橋種昭 植松治子  
日名子太郎

## 一、自由保育と劇あそび

一体に幼稚園の教師は、無反省に、そして無意識的に「自由保育」にあこがれるようである。これは、自由保育そのものの子どもに対する意義といったような深いところに根ざしているものではなく、むしろ単に自由ということばの上でのあこがれが強いようと思われる。このことは、実際に保育を参観し、また教師の研究会などに参加してみて一番強く感じられるし、また一応口先では、自由保育を賛美しながら、その反面で全くこれと相反する矛盾した強制保育とも呼ぶべき保育を平気でおこなっているという事実からも言い得ることである。もちろん、日常の保育が、一から十まで、なにがなんでも自由保育一点ばかり、あるいは強制的な一斉保育ばかりという形式は、特殊な例を除いては現実にあまり見られない。この意味から、前記のような態度がすべて誤っているとはいえない。しか

し、それが、子どもとの関係なく、全く無反省におこなわれる場合には、問題となるのである。このような事実は、一年間の保育の流れの中から無数にひろい出せるのであるが、ここでは、そのうちの一つとして「劇あそび」をとりあげてみることとした。というのは、劇あそびという名の下に、劇練習、劇発表といったことに重点をとき、そのためには、大切な保育を棚上げにして、極端な場合、第二学期の全部、あるいは第三学期の全部をそれについているような園が少なくないからである。（このことは、小学校においても学芸会などで一部見られる現象であるが、学習内容、段階の相違から、幾分問題が異なってくる）

いま、「幼稚園教育要領」に示された目標の中から、劇に關係のあるものを挙げてみると、  
「自由な表現活動によって、創造性を豊かにする。」  
という項の中に、

○ごっこ遊び、劇遊びなどによって、生活感情を表現するようにならる。

これでも明らかな如く、劇あそびが幼稚園でおこなわれるねらいは、「自由な表現活動によって、創造性を豊かにすること」なのであり、生活感情を表現するよう「すること」なのである。(ただし、このねらいを達成するに必要と思われる望ましい経験の展開が教育要領においてじゅうぶんでない点は、たいへん不備であり、現場の誤解をまねいても仕方のない点が少くない。) もしこのねらいが、本当に現場の教師に理解されていれば、前述のような誤った指導の仕方はおこらないはずなのであるが、現実には「保育の効果」といいうものが、とくに劇の出来ばえとか舞踊の発表などの形で親や世間から評価されがちなことが、それをかき乱す大きな原因となつてゐるのである。そこで、本篇では、さきに日本保育学会第十二回大会で発表した資料を中心に、これらの点について考えていく。

## 二、脚本による劇指導の可否

現実に、脚本—それもおとなが予め書きおろした既成のもの—に立脚して、幼児に口移しに台詞を教え、さらに動作まで指導すると、いったことがおこなわれている以上、これがどんな結果を幼児にもたらすかを、教師として知らなければならぬ。

我々の実施した実験では、市販の脚本は用いず、絵本をもとにし

評価	+2	+1	0	-1	-2
人數	31.0	41.4	27.6	0	0

第1表 練習中の参加態度

評価	+2	+1	0	-1	-2
人數	13.6	61.0	11.8	13.6	0

第2表 練習中の協力態度

しかし、「練習中における協力態度」では、「うながされてしばしう協力をする、<sup>1</sup>」が、第2表のように表われているが、他の自由遊びから劇あそびに発展させたグループでも若干は表われているから、それほど強調されるべきではないよう思う。

次に、「語いの変化」をみると、予想に反して(「いの」は、一定の脚本に基づいて台詞を教えた結果、当然のことながら学習効果が現われ練習した台詞中に含まれることばの語いが増すと考えられたことを予想した)、実験前に理解できなかつたことばの数と、実験後におけるそれとを比較してみると、次頁の第3表の通りであり、著るしい変化が見られない。

被験者	No.										計 I.Q.
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
ことばの増減	-1	+2	+1	+2	-3	-1	+1	+3	+1	+1	+6

（増した言葉数………(+)  
 減じた言葉数………(-) (または忘れたもの)

第3表 理解できる言葉数の増減

それでは、こういった劇指導のおこなわれる最大の要因であるせりふの巧拙、役割演出の巧拙、および劇のできばえを比較してみて、自由あそびから劇あそびへと発展したグループとの間に特にまさると思われる点は、少なくもこの実験においては無かつたのである。

以上の事実は、換言すれば、

(1)脚本などに基づく劇指導が、自由保育論者のいうほど、児童自身には強く意識されない、あるいは抑圧を与えないのではないかと

逆に、(2)劇指導をおこなつても、児童の場

合、結果的にそれほど効果はないのではないか、

という二つの問題がうかんでくるのである。そして、このことは、自由、強制いずれか一方の立場のみを主張する保育者には、ともに失望感を与えるかもしれない。

この点について、我々は、保育者が、余りに文葉末節にこだわつて神経質になり、全ての指導的なこと、命令的、禁止的なことは、

いけないと考えてしまつたりしてはならない、ということを主張した

い。(この一例として、坂元彦太郎氏の「自由遊びの意義と実際」の中の「自由遊びの打ち切り方」を参照されたい。児童の教育、第五八卷・第十二号)

またその反面、保育者ともあろう人が、あまり結論的には効果のあがらとも見えない劇練習などに神経を使い、子どもを疲労させ、大切な日常保育の時間を費すことは、いかに世間や親が望むこととはいえ、愚の骨頂だと言わなければなるまい。この二つの事は、一見異なっているようではあるが、実は一つの事なのである。すなはづ、津守のことばを借りれば、「実は自由遊びとは方法の問題なのである。すなはち、どのような状況にあっても、教師が、子どもたちの活動を生かし、子どもと共通の目標を見出して指導しようとするところに自由遊びが生まれるし、教師が子どもの意図を顧慮せず、子どもの考えとはくい違うところに目標を設定しようとするところには自由遊びは存在しない。」ということなのである。

\* 「自由遊び論」児童の教育、第五八卷 第十二号、第二十七頁

### 三、保育方法と知能の問題

前述の実験で、二つのグループを等質とする条件として採用したものの中に「知能の程度」があつた。(第4表)

平均値を示すと、第5表次のようにある。団体検査によつて選んだため、個人検査の結果では、Bグループの方が、やや知能の平均が高い。

従来、保育方法を個人差に応じて考えなければならないことは言われてゐるし、また、ちえおくれのような特殊な児童については、別に考えられているが、案外、一般的の児童の場合、その知能が考え

被験者	性別		(1) I.Q.	(2) I.Q.
	女	男		
A グループ	1		107	103
	2		103	80
	3		91	109
	4		96	92
	5		110	100
	6		122	91
	7		96	92
	8		114	98
	9		114	96
	10		104	109
B グループ	1		115	87
	2		108	102
	3		97	92
	4		114	98
	5		121	109
	6		131	90
	7		110	92
	8		105	109
	9		111	91
	10		108	91

ただし  
(1)鈴木・びね一式個人検査による  
(2)幼児用田中B式団体検査による

第5表 知能の平均値  
I.Q. (1)……鈴木びね一式個人検査  
(2)……幼児用田中式団体検査

第4表 知能の程度

に入れられていない。しかし、この実験の場合、実験者の観察によれば、自由遊びの発展性、逆に脚本による台詞の記憶、演技などが、極めて知的能力に支配されることが報告で、余り詳細にはいえぬけれども、このような観点からの保育方法への反省がなされなければならないことを注意したい。特に、幼稚園では、集会などで教師が発言する場合、「自分の園では……」という言い方で、その園内で接した幼児だけを通じて得た体験から、全般的な幼児に関しての推論を下しがちであるけれども、優秀

我々の採用した実験的な研究は、最初にも述べたように、極めて不備なものであるが、それにもかかわらず、多くの示唆を与えてくれた。保育効果の研究は、幼児教育における評価法の研究とともに、保育におけるもともと基本的な問題であるにもかかわらず、今日、主として方法論、カリキュラム論的なものが多いのは、一応、この種の研究が、困難を伴うということ、また日常の保育が、経験的に、これらの点を把握しておけば事足りるといった理由から、等閑視されてきたようである。しかし、この種の研究が進められ、自然的な成長ばかりではなく、人間の発達を促がすに必要な、能率を考えた保育というものが、考えられるようにならなければいけないのではないかろうか。

このようない意味からも、テスト法や観察法を駆使して、日常保育における幼児の実態を把握していくことも一つのよい方法であるけれども、同時に、いろいろな制約は当然あるにしても、実験的な方法が漸次とり入れられて、一つ一つの分野における問題が少しでも解明され、あるいは問題点が把握されて来てこそ、方法論的な面に関しても、根本的な理論への手がかりが得られるであろう。

児の多い園と、それほどでもない園とでは、余程違うということを考えおかなければいけないとと思う。おそらくもっと知能の高いグループを編成して実験すれば、他の結果が見られたかもしない。

#### 四、保育効果の研究における今後の問題